

発達とトラウマから診る精神科臨床

青木省三著

医学書院, A5判240頁, 3,520円, 2025年6月刊

(跡見学園女子大学) 下山晴彦

本書は、メンタルヘルスの問題で苦しむ人々だけでなく、メンタルヘルスに関わる援助職にとっても救いの書である。著者は、「はじめに」において「背景に発達症やトラウマがあることに気づくことによって、治療や支援がいくらか、時に大きく変わらと思う」と明確に述べている。統合失調症や双極症などの「診断」がつけば薬物療法がなされる。しかし、背景に発達症やトラウマの問題があるならば、精神療法や環境調整が薬物療法よりも重要になる。そのような問題の「理解」があることで、治療や支援が変わる。それによって、誤診や多剤大量投与で苦しむ患者さんが救われる。本書では、「診断」と「理解」を異なるものとする。「診断」は「生物学的な要因を主とする精神疾患ではないか」と客観的に観察し、診断することであるのに対して、「理解」は「生活や生活史などから『何か困ったことがあり、その自然な反応として精神症状が起きているのではないか』とその主観的体験を理解することとなる。著者は、本来相補的であるべき両者が、近年の精神医学では「診断」に偏り、患者さんの「困りごと」に気づかず、主観的体験や環境要因の重要性を見落としていると、その問題点を指摘する。それは、日本の精神医療が診察室を出て、多職種のスタッフや地域の障害福祉サービスの支援者との連携に基づくメンタルケアの発展が求められているとの本書の主張につながる。

目次構成は、前半で発達特性とトラウマを軸とする問題分析の要諦が提示され、精神科領域で誤診がどのように起きるのが説明される。中盤では、ほぼすべての診断分類ごとに誤診が起きる状況を、具体的事例を通して分析し、それに替わる支援のあり方を提案する。穏やかな語り口で解説が進むが、分析の論理展開は圧巻である。後半では問題改善に向けての対処法が提示される。本来であれば、すべての内容を紹介したいところであるが、紙幅の都合で

前半のみ紹介する。まず、その人の「困っていること」に気づけるようになるために、問題を「反応性」として理解することが提案される。それは、①発達特性やトラウマがあるところに、②心理社会的な負荷が加わり、③反応性に精神症状が出現したと考える仕方である。なお、本書では、発達症を定型発達と連続するスペクトラムとし、「発達特性」として捉える。PTSDも、死に直面するような出来事基準を満たさなくても、強い恐怖を感じたトラウマ体験も含めて広く「トラウマ」を捉える。さらに発達特性とトラウマが相互に影響し合う（「発達⇄トラウマ」）ことで問題が悪化することに注目する。このように「困ったこと」の理解は、患者さんへの現実的な共感を可能にするとともに環境調整の契機を見出すという点で支援につながるのである。

評者は、本書を読み、旧来の医学モデルに捉われない、生活機能に基づく社会モデルの支援が、日本の現状に即して具体的に、しかも繊細で緻密な筆致で解説されていることに深い感銘を受けた。諸外国では既に定着している、患者さんを中心とする多職種協働チームによる問題改善に向けての支援を、日本でも実践するための道筋が示された意義は大きい。最後の章で著者は、これまで統合失調症を中心に身体（脳）因論に基づいてきた精神医学の歴史を、「統合失調症メガネ」をかけてきたとして、その偏りと限界を指摘する。「発達特性」や「トラウマ」は、まさにそこで見落とされてきた事柄である。だからこそ、著者は「発達メガネ」と「トラウマメガネ」をかけてみることを推奨する。問題を連続線上で捉えるディメンジョン理解が進む世界標準のメンタルケアの活動が、精神疾患のカテゴリー診断に偏っている日本のメンタルヘルス領域においても、遅かれ早かれ広がることが予想される。本書の内容は、その動向を日本の現状を踏まえて体系的に解説した先駆的な書物である。本書は、大きな変化に向けてチャレンジしていかなければならない日本のメンタルケア関係者にとって待望の、救いの書である。患者さんも含めて多くの方に読んでほしいと願っている。